三納小中学校
校長室便り

手をつなごう

令和６年３月２６日（火）
第１４号（本年度最終号）
文責　校長　鮫島　良樹

卒業おめでとうございます

中学部卒業生17名。義務教育を修了し、故郷の学校を離れ、散り散りに巣立っていきます。私事ではありますが、小学校籍の校長ですから、中学校の卒業式を教師という立場で見送るのは初めての経験。ものすご～く感動しました。（中学生がこんなに泣くのかい？）と思うほどの姿を目にし、改めて、三納っ子の純粋さ、情の厚さを感じるとともに、それを育んだ三納地域の懐の深さを認識することができました。卒業生はみんな、第１志望の進学先に合格することができました。「この子たちに明るい未来、幸せな未来が来ないはずがない！」と今もこれからも信じています。これからもたくさん学んで、より魅力的な自分へと磨きをかけてほしいと願っています。

小学部卒業生14名。3名が新天地へ向かい、11名が三納中学校へ進学します。（同じ校舎で代わり映えしない）ではなく、「次のステージに進んだ自分がどれだけのことに挑戦し、失敗や成功を経ながら、どれだけの成長を遂げられるか」という意識が重要です。残り2年となった三納中学校の有終の美を飾る子どもたちです。今後もご支援の程よろしくお願いします。

３月１６日中学部第７７回卒業式

３月２５日小学部第１３２回卒業式

転出のご挨拶

このたびの定期異動により、三納小学校を去ることになりました。わずか1年の在任期間、まさしく「志半ばで…」となり、大変、残念無念の心中でございます。私は三納が大好きでした。

宮の下から車を走らせて来ると、私の幼少期の原風景が一面に広がります。いつも農家さんになった気分で作物を眺めながら、その成長を楽しみにしていました。歩道に目をやると、まだ7時過ぎなのに、歩幅の違う高学年と低学年の児童が学校に向けて、一歩一歩、歩みを進めています。気が散って間が空いてしまい、小走りで追いつこうとしている1年生。歩みが日に日にたくましくなりました。小雨の日も寒い日も自分の足でしっかりと学校に通っていきました。

そんな下級生を時折振り返り、気遣いながら歩む5年生。（いつまでもこの子のペースに合わせていたら学校に着くのが何時になるか分からないわ。）と思うこともあるのでしょう。でも、（私が連れて行ってあげなきゃ。）そんな葛藤が背中から伝わってくるようです。こうやって、上級生らしさを身に付け、頼もしい存在になっていくのですね。人を育てる際は、厳しさと優しさの両面が必要です。

前方に目をやると、学校近辺は三納川から立ち込めた霧に包まれ、神秘的な世界が広がっています。そこに入れば、今日も登校中の子どもたちのように、様々な物語が展開され、そこに当事者として関わらせてもらうことができます。小学校1年生から中学校3年生までの成長を見ることができる学校、何てワクワクさせられるのでしょう。当初は1つの校舎に2つの学校があるようで、あっち行ったりこっち行ったりと気ぜわしく感じましたが、（全部つながっていくんだ…）と実感するようになってからは、愛おしさがどんどん増していきました。

保護者や地域の方々も、本当にいい方ばかり、一生懸命な方ばかりで、すごく親しみが湧きました。地域づくり協議会の重鎮の方がウェットスーツを着込んで川に入り、自らカヌー教室を開いておられる姿を見てびっくりしました。コロナで規制をたくさん強いられた子どもたちに、伸び伸びとやる楽しさを味わわせたいと考え、趣向を凝らされるお父さんやお母さんの姿に熱いものを感じました。

手前味噌ですが、先生たちも素晴らしい方揃いです。

ブラックと言われる職場にあって、弱音も不満も一切吐かず、子どもたちのために本当に献身的に働き、同僚同士で助け合い、明るく振る舞い合いながら勤務されています。（自分の指導が至らないから…）と真摯に批判を受け止めたり、謙虚に学んだりする姿を間近でたくさん見てきました。

そんな皆様に支えられながら、最近ようやく地に足がつき、来年こそは！とやる気をみなぎらせていました。

そんな皆様と、さらに親交を深めながら、子どもたちや地域のため「手をつないで」取り組めることに大きな希望を寄せていました。

私が大切に思ってきた職員、子どもたち、保護者や地域の皆様、そして、三納の風土。もっともっと関わり、自分のやりたいことをしたかった…。何もできなかったと悔やむ私に、先輩が「何ができたかではなくて、何がしたかったじゃない。」と諭してくれました。達成感はありませんが、充実感は大きく、満足しています。離れていても思い続ける場所、人、それが「ふるさと」だと考えています。大好きな三納は私のふるさとです。これまで、本当にありがとうございました。